

日本語教育の標準に関するワーキンググループの進め方について

【目 標】

日本語教育小委員会における検討の基礎資料とするため、日本語教育の標準について以下の(1)(2)を中心に検討を行い、参考となる資料を取りまとめ、小委員会に報告する。

- 1) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について(以下、「標準的なカリキュラム案」という)や、「JF日本語教育スタンダード」を参考に、日本語教育の標準を策定する。その際「言語のためのヨーロッパ共通参照枠(CEFR)(以下、CEFRという)を参考とする。
- 2) 文字(ひらがな・カタカナ・漢字・ローマ字)を含む日本語のレベル別能力記述を策定する。

【日程(予定)】

6月10日(月) 11:00～	第1回日本語教育の標準に関するワーキンググループ
-----------------	--------------------------

1. 日本語教育の標準の現状と課題
2. 日本語教育の標準の策定に当たってCEFRを参照することについて
3. 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について
4. 国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」について
5. 今後の検討作業について
 - ①CEFR補遺版(The CEFR Companion Volume with New Descriptors)の翻訳・分析
 - ②標準的なカリキュラム案の能力記述のCEFRの共通参照レベル振り分け試案
 - ③標準的なカリキュラム案及びJF日本語教育スタンダードを参考とした日本語教育の標準の素案
 - ④文字について

⇒6月24日(月) 第2回日本語教育小委員会

9月(日程調整中)	第2回日本語教育の標準に関するワーキンググループ
-----------	--------------------------

⇒9月20日(金) 第4回日本語教育小委員会

10月(日程調整中)	第3回日本語教育の標準に関するワーキンググループ
------------	--------------------------

11月(日程調整中)	第4回日本語教育の標準に関するワーキンググループ
------------	--------------------------

「日本語教育の標準について(一次報告)」ワーキンググループ試案

⇒ 12月 第5回日本語教育小委員会

⇒ 1月 第6回日本語教育小委員会

令和2年2月～3月：国語分科会に第一次報告案の提出、審議

令和2年度中：意見募集を経て第一次報告を取りまとめ

日本語教育の標準に関するワーキンググループの検討状況（案）

1. 日本語教育の標準の現状と課題

- 我が国に在留する外国人は、273万人と過去最高を記録し、人口比も2%を超えて増加傾向にある。在留外国人の定住化が進み、来日当初の生活に必要な日本語や初期段階の日本語のみならず、子育てや就労等に必要となる、より高いレベルの日本語が求められるようになってきた。
- 特定技能の在留資格が新設されたことにより、就労を目的とした在留外国人が増加し、入国要件等に一定の日本語能力が課せられるようになった。しかし、国としての日本語教育の統一的な標準は策定されていない。
- 日本語教育の標準に関する議論の際には、欧州評議会の「言語のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）」の実践の成果や課題を踏まえて検討するのが適当である。
- 外国人が日本での日常生活を安全・安心に送るために必要な日本語の教育内容として、国語分科会が平成22年に「生活者としての外国人に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」を策定した。生活場面ごとに求められる能力が4技能（読む、聞く、話す、書く）別に挙げられているものの、言語行動の難易度に対する配慮は十分ではない。
- （独）国際交流基金がCEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）を参考に「JF日本語教育スタンダード」を策定し、海外における日本語教育で活用されている。国内では、国語分科会で策定された「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」（以下、「標準的なカリキュラム案」という。）が活用されている。これらを総合する視点が重要であるとの指摘がある。
- 現在、国内で実施されている日本語能力の判定テスト（約20の機関・団体）は、統一された日本語教育の標準がないため、個々の指標に基づき、レベルや判定基準等が設定されている。このことにより、日本語を学ぶ外国人や外国人を雇用する企業等が日本語能力の判定に必要なテストを選びにくく、日本語のテスト間の評価の比較ができない状況にある。
- 日本語教育の標準が策定されることにより、現在実施されている複数の日本語能力の判定テスト間の相互通用性が確保されることが期待される。その際、日本語教育の標準に示されたレベルと各テストの関係の示し方について検討する必要がある。
- 外国人を雇用する産業界・経済界が職務内容に応じて採用条件として求める日本語能力の参考となる指標が整備されていないとの指摘がある。各業界別が指標を作る上で参照できるよう、一般的な日本語教育の標準を策定する必要がある。
- 日本語がCEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）を参照する際に、日本語の文字（平仮名、片仮名、漢字、ローマ字）について新たに検討する必要がある。
- 日本語のテストは、受容能力（聞く・読む）を測るものが多く、産出能力（話す・書く）を含めたコミュニケーション能力を測定するテストが少ない。また、CBT（Computer Based Testing）による試験の開発が遅れている。

CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）について

「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages）」は、言語の枠や国境を越えて、外国語の運用能力を同一の基準で測ることができる国際標準です。

CEFRは、学習者、教授する者及び評価者が、外国語の熟達度を同一の基準で判断しながら、学び、教え、評価できるように開発されました。CEFRの等級はA1、A2、B1、B2、C1、C2の6段階に分かれており、その言語を使って「具体的に何ができるか」という形で言語力を表す「can-do descriptor」を用いて分かりやすく示しています。

外国語の熟達度を表すCEFRの等級には、コミュニケーションの状況や話題、人が行う行為、目的に関する分析のほか、コミュニケーションに用いられる能力について等級別の解説も記載されています。そのため、単に言語の熟達度を示すことに留まらず、教育研修や、教育課程の改革、教材開発等においてCEFRがますます用いられていると考えられます。

CEFRは欧州評議会によって、20年以上にわたる研究と実証実験の末に開発され、2001年に公開されました。現在では38言語で参照枠が提供されています。また、CEFRは言語資格を承認する根拠にもなるため、国境や言語の枠を越えて、教育や就労の流動性を促進することにも役立っています。

段階	レベル	能力レベル別に「何ができるか」を示した熟達度一覧
熟達した言語使用者	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいてい事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について単純で直接的な情報交換に応ずることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現を基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

CEFR 共通参照レベル：自己評価表（イメージ案）

<参考2>

段階	レベル	理解すること		話すこと		書くこと
		聞くこと	読むこと	やりとり	表現	書くこと
熟達した言語使用者	C2	速いスピードで話されても、その話し方の癖に慣れる時間的余裕があれば、どんな種類の話言葉も難なく理解できる。	抽象的で構造的にも言語的にも複雑な、例えばマニュアルや専門的記事、文学作品の文章など、事実上あらゆる形式で書かれた文書でも容易に読むことができる。	慣用表現、口語体表現をよく知っていて、どんな会話や議論にも難なく加わることができる。自分を流暢に表現し、細かなニュアンスなども詳しく伝えることができる。表現に詰まることがあっても、周りの人がほとんど気づかないほどに修正し、うまく繕うことができる。	状況にあった文体かつ効果的な論理構成で、明快かつ流暢に説明や議論ができる。それにより、聞き手に要点を捉えさせ、記憶に留めさせることができる。	明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。効果的な論理構成で事情を説明し、その要点を読み手に気づかせ、記憶に留めさせるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。仕事や文学作品の概要や評価を書くことができる。
	C1	構成が曖昧で、関係性も暗示されているだけで明示的でない場合であっても、長い話が理解できる。テレビ番組や映画を難なく理解できる。	長い複雑な事実に基づく文章や文学作品を、文体の違いを認識しながら理解できる。自分の関係しない分野での専門的記事や長い技術的な説明書も理解できる。	言葉を探さなくても流暢に自然に自己表現できる。社会上、仕事上の目的に合った言葉遣いが、自由に効果的にできる。自分の考えや意見を正確に表現でき、自分の発言を他の話し手の発言に上手に合わせることができる。	複雑な話題を、派生的問題にも立ち入りつつ詳しく論ずることができ、一定の論点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。	いくつかの視点を示して、適当な長さで明瞭な構成の自己表現ができる。自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。読者を念頭に置いた適切な文体を選択できる。
自立した言語使用者	B2	長い会話や講義を理解することができる。また、話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが複雑であっても理解できる。テレビのニュースや時事問題の番組も大体分かる。標準語の映画であれば、大部分理解できる。	筆者の姿勢や視点が表れている現代の社会問題についての記事や報告が読める。現代文学の散文が読める。	流暢に自然に会話をすることができ、普通にやりとりができる。身近な文脈の議論に積極的に参加し、自分の意見を説明し、弁明できる。	自分の興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について、明瞭で詳細な説明をすることができる。時事問題について、いろいろな可能性の長所、短所を示して自身の見解を説明できる。	興味関心のある分野のことであれば、幅広い話題について明瞭で詳細な説明文を書くことができる。エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点での賛成や反対の理由を書くことができる。手紙の中で、出来事や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。
	B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。話し方は比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題についても、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。	非常によく使われる日常の言葉や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こった出来事、感情、希望が表現されている私信が理解できる。	旅行中によく起きる状況に対処することができる。例えば、家族の趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備がなくても会話に入ることができる。	簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語るができる。意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。物語を語ったり、本や映画のあらすじ、それに対する感想、考えを表現できる。	身近な、個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所、仕事などの直接自分に関連した領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点が聞き取れる。	ごく短い簡単な文なら理解できる。広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のようなものの中から一定の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる。簡単で短い個人的な手紙は理解できる。	単純な日常の生活の中で、直接情報のやりとりが必要な場合、身近な話題や活動についてやりとりができる。通常は会話を続けていくだけの理解力はないのだが、短い社会的なやりとりをすることはできる。	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴などを簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる。	直接必要のある領域での事柄であれば、簡単な短いメモやメッセージを書くことができる。短い個人的な手紙を書くことができる。（お礼の手紙など）
	A1	はっきりとゆっくり話してもらえれば、自分、家族、身近なことに関する聞き慣れた語やごく基本的な表現が聞き取れる。	例えば、掲示やポスター、カタログなどのよく知っている名前、単語、単純な文であれば理解できる。	相手がゆっくり話し、繰り返したり質問したりして自分が言いたいことを表現するために助け船を出してくれれば、簡単なやり取りができる。必要なことやごく身近な話題についての簡単で直接的な質問であれば、聞いたり答えたりできる。	居住地や知人について、簡単な語句や文を使って表現できる。	新年の挨拶など短い簡単な葉書等を書くことができる。例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所などの個人のデータを書き込むことができる。

※この他、カリキュラム案やJF日本語教育スタンダードを参考に各レベルの5つの言語活動別のディスクリプター（例示的能力記述文）を各10～30程度作成し示すことを検討中。